

インタビュー

エジソン発明品収集家

ヘンリー幸田先生を囲んで

出席者

クイン・エマニュエル法律事務所
米国弁護士 ヘンリー幸田
広報センターパテント編集部
第1班 班長(司会) 横山 照夫
神蔵 初夏子
森 俊晴
荒木 邦夫
開催日：2009年7月9日(木)



ヘンリー幸田氏

【横山】 本日はヘンリー幸田先生にインタビューさせていただくため、幸田先生の事務所にお邪魔しております。

ヘンリー幸田先生とのインタビューは、日本弁理士会の前中島会長からのご推薦で実現致しました。

ヘンリー幸田先生は米国弁護士をされておりまして、クイン・エマニュエル事務所のパートナーをされております。現在、日本の法科大学院でも教えていらっしゃるということで、日本とアメリカの両方で仕事をされております。

幸田先生は、エジソンの発明品の収集家としても知られております。本日は、エジソンの発明品について、いろいろお話をお伺いできればと思います。よろしく願いいたします。



【幸田】 そうですか。了解しました。

【横山】 まず、幸田先生から簡単に自己紹介をお願い致します。

【幸田】 では、私からですか。

私は1943年に東京の大田区で生まれました。その後、新潟でちょっと子供のころ過しまして、また東京に戻りました。最初、学習院大学の理学部で化学を勉強しまして、1年間、サラリーマン生活を経験しました。杏林薬品という製薬会社です。

その後、杏林をやめまして、昼間、特許事務所で

働いて、夜、明治大学の法学部の夜間に行きました。1970年に、僕は弁理士になりまして、弁理士会にしばらく入っていました。

1972年に、僕は移住するつもりで、カリフォルニア州ロサンゼルスに移りました。そこでユダヤ系の法律事務所に勤務しました。そこでまず、アメリカの弁理士資格、パテントエージェントという資格を取りました。後になって、ニューヨークの弁護士資格を取りまして、1977年に独立して、ビル・アンドローラというアメリカ人の弁護士とパートナーを組みましてコーダ&アンドローラという法律事務所をロサンゼルスで開設しました。ちょうど30年後の2007年に今のクイン・エマニュエル法律事務所というところに合併しました。ですから、全員そろって、クイン・エマニュエルのほうに移籍しました。M&Aです。

2007年12月に東京オフィスを開きまして、その日本の代表ということで働いております。

今、お話がありましたとおり、僕は、日本の創価大学のロースクールでアメリカ法とか知財法を教えています。そういう関係がありますので、春と秋、僕は日本で仕事をして、夏と冬はロスに戻って、ロスで仕事をしております。そういう生活がもう4年になります。

僕は、専門は知的財産権、特許が中心です。あと、商標に、著作権も手がけています。

日本のクライアントは仲よくなりますと、知財に限らず、いろんなことを頼んでくるんです。ほんとうに

いろんなことを頼んできます。ですから、会社の設立とか、あるいはプロ野球選手と大リーグの契約や映画制作に関する契約・交渉、そういったものが、いろいろ幅が広がってききましたけど、中心は知財に関する訴訟と鑑定です。

【横山】 ありがとうございます。次に、広報センターの Patent 編集部員の自己紹介をします。ではまず私から。Patent 誌の 9 月号を担当しております、横山と申します。よろしくお願いいたします。

【幸田】 よろしくお祈いします。

【横山】 私は、エジソンの発明品を見たことがございません。実物を見せていただくのは初めてです。

【幸田】 そうですよ。なかなか実物を見る機会に限られていますね。

【横山】 非常に楽しみにしてまいりましたので、ぜひよろしくお願いいたします。

【幸田】 そうですか。よろしくお祈いします。

【森】 同じく 9 月号の Patent 編集部員を担当しております森と申します。よろしくお願いいたします。

【幸田】 よろしくお祈いします。

【森】 私も、きょう、先生からエジソンの発明に関するお話とかをいろいろ聞けるということで、非常に楽しみにして参りました。

【幸田】 そうですか。

【森】 実物も先ほど少し見せていただきましたが、後ほど詳細に見せていただけたらと思いますので、本日はよろしくお願いいたします。

【幸田】 そうですね。よろしくお祈いします。



【神蔵】 同じく 9 月号担当の神蔵初夏子と申します。商標をふだんはメインでやっています。

【幸田】 そうですか。

【神蔵】 私は弁理士を受ける前に、ちょっと司法試験をかじっていたこともあったので、お時間がありましたら、ロースクールの話などもお聞きできたらと思います。よろしくお願いいたします。

【幸田】 そうですか。わかりました。

【荒木】 同じく編集員の荒木と申します。本日はよろしくお祈いいたします。

私は 2000 年に先生が出版なさったビジネスモデルのこんな小さなものでしたけれども……。

【幸田】 文庫サイズでしたね。

【荒木】 はい、それを読んだ覚えがあります。

【幸田】 そうですか。

【荒木】 内容が大変ドラマチックで、感激したことを覚えています。

【幸田】 そうですか。それはありがとうございます。

【荒木】 ご本人にお会いできるということで、きょうは大変楽しみにしてまいりました。よろしくお願いいたします。

【幸田】 そうですか。よろしくお祈いします。

【横山】 それでは、先生のご経歴をお伺いさせていただきます。まず、最初に、日本の弁理士になられたということですが、弁理士を志されたきっかけはどのようなものだったのでしょうか。

【幸田】 そうですね。もう古い話ですけれども、正直にお話ししますと、僕は最初、理科系の理学部化学科を卒業しました。僕の同窓生なども製薬会社に入る人が多かったんです。僕も杏林薬品という製薬会社に入りました。そこで化学の研究者として進む予定で会社に入ったんですが、僕はこれは自分に向いていないと思ったんです。今から考えると、化学もきちんと勉強すれば、もっと楽しかったのではないかと思うんですが、僕は化学の研究で自分の一生を過す気にどうしてもなれなくて、いろんなことに手を出したんですけれども、ある日、ある時、英語を勉強に行ったんです。

今でも覚えていますけれども、神田外語学校というのがありまして、サラリーマンをやっていて、そこに夜、英会話を習いに行ったんです。その僕のクラスを教えていた先生が、テキサスから来た女性だったんです。非常に元気のいい女性で、明るくて、僕たちはものすごく気が合ったんです。クラスを終わると、いつも一緒にコーヒーを飲みに行って、いろいろ話していたんです。

その人がよく、「What's your dream?」と言う。「あなたの夢は何だ」というようなことを聞くんです。最



初、僕は答えられなかったんです。えっと、自分の夢などを突然聞かれても、もたもたしていたんですけれども、2回、3回、聞かれるうちに、何か言わなくちゃならなくなってしまって、僕はいろいろ考えて、「よし、おれはアメリカへ行って、自分のビジネスをやる」と言ってしまったんです。それで終わったと思ったわけです。

そうしたら、その人が積極的な人で、いつ、どうやって行くんだと迫ってくるんです。そんなことを言われても、アメリカへ行ったことはないし、知り合いは1人もいないし、お金があるわけではないし、困ってしまって、また追及されたわけです。そうしたら、その人が、そういうときは電話帳を見るといいと言うんです。職業別のものが載っているんでしょう。アメリカではイエローページというんですけれども、その職業欄を見ていったんです。職業の数を数えると、1,000以上ありました。

この女性は漢字を少し勉強していたんです。ある程度読めるんですけど、「特許事務所」というのが出てきたんです。「これは何だ？」と僕に聞くわけです。僕はそれに答えられなかったんです。特許は漠然と分かるし、事務所もわかるけど、特許事務所は何だろうなと思って、それで、何となく好奇心を感じたんです。一種の直感ですか。僕もその人も、これは多分一番将来性があるって、国際性がありそうだなと感じました。全くもう勘なんです。

それから、調べ始めて、僕も特許事務所、弁理士のことを調べて、その女性もまたアメリカ大使館まで行って調べてくれたんです。アメリカではパテント・ローヤーという職業があって、そういう人たちは技術をやって、それから、法学部へ行くものだと、あなたも法学部へ行きなさいと言うんです。

僕の世代でいくと、1つ大学を出て、もう一回大学へ行くという発想がないんです。もう1つ終わったら、そこでおしまい。大学院へ行く人も少なかったですし、1つの大学へ行って、もう一回大学へ行き直すということは、よっぽどの経済的に余裕があるか、あるいは、もうほんとうの変人です。だから、僕は1つ大学へ行ったから、もう行けないんだというようなことを言ったんです。その女性は、ものすごくカラッとした調子で、「Why not ?」と言うんです。

「Why not ?」と言われて、1つ大学へ行って、もう一つ大学へ行ってはいけない理由というのは何だろ

うなと考えると、理由はないですね。ただただ、だれも行かないから、僕も行ってはいけないものだと思います。で、「Why not ?」と言われていたわけなんです。うちに、僕はだんだんその気になってきたんです。その女性がものすごくカラッとした人なんです。ねちねち言うわけではなくて、ほんとうに、あの人には素朴に、不思議に思ったんでしょう。「Why not」という発想は、それ以来、ぼくの頭の中に残りました。今でも残っています。

僕も考えているうちに、あ、そうか、もう一つ大学へ行ってもいいのかななどと思って、それで、僕は思い切って、ある特許事務所に入りまして、夜、今度は明治大学の法学部に行き始めたんです。そうしたら、勉強が結構楽しかったんです。その延長線で弁理士試験に受かって、それが1970年、僕が27歳のときでした。

受かったときに、大きな事務所、協和特許法律事務所というのがありますが、あそこに移りまして、僕はアメリカの特許の勉強をして、英語も勉強して、2年間そこにおいて、1972年にロサンゼルス法律事務所の仕事を見つけました。それで、思い切って僕はアメリカに行ったんです。

【横山】 当時だと、まだアメリカのほうに行かれるという方は、そんなにいらっしゃらなかったのではないのでしょうか。

【幸田】 いなかったです。ほんとうに僕の周りに1人にもいなかったです。だから、相談する人はだれもないじゃないですか。アメリカに行ったことはあると言っても、特許などと聞いても、だれも答えられないじゃないですか。

実は、僕もアメリカ大使館に相談に行ったことがあるんです。だれも答えられなかったんです。どうやったら、アメリカのパテント・ローヤーになれるんですかと相談したんです。アメリカ大使館でもって、みんなが右往左往して、だれも答えられなかったです。

【横山】 そうすると、アメリカの事務所を探されたと思いますが、どのように探されたのでしょうか。

【幸田】 それはね、これももう昔の話だから、ざっくりと正直に言いますが、どうしていいかわからなかったんです。幾つか課題があったんです。アメリカへ行って、自分のビジネスを始める。それも特許事務所を始めると決めてしまったんです。でもどうやっていいかわからないではないですか。それで、僕

はアメリカの法律事務所とか、あるいは、大きな会社、GEとかGMとかコダックとか、そういうところに毎日、手紙を1通書くという、自分自身で自分の日課にしたんです。1日に1つ手紙を書くんです。

最初はもう英語の手紙などは書いたことないですから、ものすごく下手くそな、手書きです。そのころタイプも使えないし、もちろんコンピューターはないですから、メチャクチャな手紙だったと思うんです。それを1通書いて、2通書いて、50通書いて、100通書いて、返事が来なかったんです。僕は、返事は来ないだろうと思ってたわけ。こんな手紙をもらったら、だれも雇う気にならないだろうというのは覚悟していたわけですが。でも、不思議なもので、100通を超えたら、英語の手紙がいつの間にかうまくなっていったんです。

僕は今でも覚えています。200通まで書いたんです。1日1通、だから、200日以上かかったと思うんです。1日1通手紙を出すということは、下書きを入れると、その5倍ぐらい書いているんです。最初はとにかく下手くそですから。だから、200通の手紙を書いたということは、おそらく1,000通くらい手紙を書いたと思うんです。自分で言うのも何だけれども、1,000通手紙を書いたら、英語の手紙書くのうまくなります。

【横山】 明細書と同じですね。

【幸田】 そうですね。ほんとう、最初のものなどはメチャクチャだったと思うんです。それが最後のほうは結構格好いいことを書いて、「ここにダイヤモンドが転がっているんだ。あなたは拾わないの、なぜ拾わないんですか？」と、よくあんなことを書いたと、いま思い出すと冷や汗がでます。

200通書いたところで、3通返事が来たんです。1つがロサンゼルス法律事務所、もう一つがニューヨーク法律事務所、3つ目がイーストマン・コダックだったんです。それで、僕は覚悟を決めまして、この3つのところにインタビューに行くと言って、それでアメリカに行ったんです。それが1972年。

そこで、ロサンゼルス法律事務所、ニューヨーク法律事務所、イーストマン・コダックとインタビューしてもらって、その中で一番個人的に気が合ったのが、ロサンゼルス法律事務所だったんです。

【横山】 なるほど。

【幸田】 スpensリー法律事務所というユダヤ系の事務所で、特許を中心にやっている。弁護士が50人ぐらいいたんですかね。ま、中堅の知財専門事務所だっ

たんです。そのユダヤ人の社会に、何にも知らないで、僕は飛び込んでしまったんです。それで、メチャクチャにしごかれました。ユダヤのビジネスはものすごく厳しいんです。役に立たないと、たちまち首なんです。

【横山】 その事務所は、すべてユダヤの方だったのでしょうか。

【幸田】 ほとんどそうだったんです。弁護士の80%以上はユダヤ人で、秘書もユダヤ人が多かったんです。他に黒人も白人もいろんな人がいたんです。ただ、日本人は僕1人だけだったんです。よく雇ったなと思います。

【横山】 もちろん、随分苦労されたのでしょうかね。

【幸田】 最初は何が何だか事情がわからないし、相談する人がいないじゃないですか。ロスには日系人も結構いるんですけど、広いですから、いるところに行けば、いるんですけども、僕の行ったところは、たまたま白人社会、ユダヤ社会であって、周りに日本の人は1人もいなかったんです。

【横山】 当時は、日本人で米国の弁護士になれる方はいらっしやらなかったのではないのでしょうか。

【幸田】 そうですね。

もう何年前だろう、37年前ですものね。

【神蔵】 その事務所に入ってから、あちらでロースクールに通われて、また資格を取られたということですか。

【幸田】 そうです。最初はそんな余裕もなかったんです。僕は1度日本に帰ってきて、結婚したんです。ワイフを連れて、また戻ったんです。ですから、もう生活に追われて結構大変だったんです。

【神蔵】 いきなり明細書とかを書くんですか。

【幸田】 そうです。何しろ書けないと分かったら、たちまち首ですから。

【神蔵】 そうなんですか。

【幸田】 協和特許法律事務所にいたころに、もちろん英語の明細書を扱っていましたが、まだまだそんな到底一人前どころではない。全くもう半人前にもなってないです。だから、最初は大変だったんです。一生懸命書いていくじゃないですか。僕を雇ったボスというのが、スチュアート・ルービッツというユダヤ人の弁護士なんです。そのルービッツに僕は自分の書いた原稿を渡すわけです。そうすると、ちょっと見て、ポーンとごみ箱に捨てるんです。いやらしいやつでね、僕はかっとなるんです。

【神蔵】 目の前ですか。

【幸田】 目の前。どこが悪くて、どう直せと、そういうのを彼は教えてくれないです。ポーンと捨てるだけ。僕はまた書き直していくわけです。そうすると、またポーンと捨てられて。書き直して、3回、4回、5回ぐらいですか。そういう生活がずっと続いていたんです。

最初は、僕はルービッツを大嫌いだったんです。何て憎たらしいやつだと思っていた。でも、思い出してみると、そうやって1年、2年、3年たつではないですか。いつの間にかできるようになるんです。やっぱり、そうやって鍛えられて。

僕は最初、パテントエージェントという試験に受かった。それが1975年か、76年なんですけど、そのときは、あれは、今でもよく覚えていますけど、試験には受かったけれども、登録してくれなかったんです。というのは、国籍が、今でも多分ルールズ・オブ・プラクティスにはUSシティズンと書いてあるはずですが。米国市民であって試験に受かった人は登録させると書いてある。

僕の場合は永住権を取りましたけれども、USシティズンではなかったんです。僕は登録を拒否されたんです。僕は裁判を起こしたんです。行政訴訟を起こした。そのときに、同じ年に僕とインド人とイギリス人とドイツ人、4人、外国籍の人がたまたま受かったんです。みんなそれぞれ行政訴訟を起こしたんです。こんなものは通るわけではないよと僕は思っていたんです。だって、ルールズ・オブ・プラクティス、つまり施行規則にちゃんと書いてありますから、USシティズンと。

ところが、そのときには、ルービッツという僕のボスが手伝ってくれまして、行政訴訟をやってくれて、ミスター・コーダは、パテントエージェントの公正な試験にちゃんと受かって、アメリカの法律事務所で働いて、税金も納めて義務を果たしている。そのミスター・コーダが試験に受かったにもかかわらず、国籍だけの理由で登録を拒否するというのは、アメリカの憲法違反だということで裁判を起こして、これが勝ったんです。だから、コーダ事件 (In re Koda) という名称で判例に残っているんです。

だから、僕とほかの3人がいて、4人が外国籍で初めてアメリカのパテントエージェントに登録してくれたんです。

【横山】 今では、アメリカのパテントエージェントを取得される方は多いですけども…。

【幸田】 結構出てきたのではないですか。だから、僕は第1号です。日本の日米特許判例100選というのがあったんですけども、あれに載っかっていました。そんなことがあったんです。

1977年に、ちょうどそのころまでには、僕は特許の書類とか契約書とかを書いて、ルービッツが一発でオーケーというところまで、何年かかかってやっと来たわけです。そのときの僕と一緒に働いていたビル・アンドローラというアメリカ人の弁護士と、僕は1977年に独立することにしたんです。

やめるときに、僕はルービッツにあいさつに行ったんです。いろいろお世話になりました。大分いじめられたけれども、お世話になりました。皮肉を込めて、あいさつに行ったんです。そうしたら、ふだんはもうぶっきらぼうな男が、そうか、やめるかと言って、ぼくの顔を見ながら、ぼろっと涙をこぼしたんです。僕はびっくりしてしまって、この意地の悪い、このタヌキじじいがと思っていたのが、涙をぼろんとこぼすんです。

あれを見て、僕はびっくりしてしまって、そうしたら、そのときに彼が言ったのは、ユダヤ人社会にはことわざがあって、「子供に魚を1匹与えれば、その子供は1日生きることはできるけど、魚のとり方を教えれば、その子供は一生食っていける」というようなことわざがある。自分は、おまえが日本から来たとき、何もできないのを、魚1匹を与えるのではなくて、魚をとる、とり方を教えてやろうと思ったから、かなり厳しくやったんだ。よく我慢したな、というようなことを言ったんです。

そのときに、僕はほんとうにびっくりして、あ、そうか、こいつはそんな悪いやつではなかったのかと思って、それ以来、僕は彼を兄貴みたいにして、ずっと今でも仲よくしています。

スチュアート・ルービッツというんですけど、その息子、デビッド・ルービッツがパテント・ローヤーになって、しばらく日本にいたんです。

だから、おもしろいもので、そうやって人の世は繋がりが合っているのですね。

【森】 そういった厳しい事務所ですと、途中で挫折する方とかも多いのですか。

【幸田】 挫折というか、首になります。ほんぼん首に

なります。

【森】 何回飛ばされても、先生の書いたものはルービッツさんのお目にかかったというか、これは目があるなという印象をもたれていらっしたのでしょうか。

【幸田】 彼は彼で、多分我慢したんだと思うんです。おれは我慢強いだなんて、後で言っていました。そんなことはない、オレの方がずっとガマン強いとほくは思っていました。多分、今から考えれば、彼は彼で僕を日本から採用したということについて、ほかのパートナーに対して責任があったと思うんです。だから、僕に対して、ものすごく厳しかったと思うんです。僕は厳しいというよりも、いじめられたとっていましたから。憎たらしいやつとっていました。

【横山】 最近では日本でも、そのように厳しい方はいらっしやらないですね。

【森】 そうですね。

【横山】 昔はいらっしやったのですが、皆さん、優しくなられたというか。

【森】 という話があります。

【幸田】 僕は、ロースクールは実は2回行っているのね。2回というのは、一番最初、1975年ぐらいか、小さなロースクールへ行ったんです。夜間に行ったんです。そのときに、僕は最初にクラスが始まった初日に、隣に71歳の同級生が座ったんです。座ったというか、ここに座れと。どういうわけか知らないですけど、たまたまその人の隣に座るようになってしまったんです。

何か気が合ったんでしょう。いつも隣に座るようになりました。授業が終わると、いつも、「ヘンリー、ちょっと来い」と言って、ビールを飲みに行くんです。彼はビールが好きでね。一緒にビールを飲みながら、いろんな話をしてくれるんです。僕にわからないことがいっぱいあるではないですか。いろんなことを教えてくれるわけです。

また、彼が僕に質問をして、僕が答えるじゃないですか。その答えに対して、彼が“Why?”と言うんです。すると、また、えっと思って、僕がその答えをもう一回なぜというのを説明しなければならない。苦労して考えて、また、答えるではないですか。そうすると、また“Why?”となるんです。また考えて、考えて、ものすごいしつこいやつでね。僕は、最初すごい嫌だったんです。ところが、そういう生活を半年続けている

うちに、僕はいつの間にか勉強が好きになりました。僕は、それまで勉強は嫌いだったんです。試験のためにしようがないからやっただけで、日本語で「勉強して強い」と書くのではないですか。まさにああいう感覚だったんです。

ところが、この71歳のおやじと毎晩のように、ビールを飲みながら、“Why?”, “Why?”とやられているうちに、“Why?”と聞かれると、大分深く、深く掘り下げるようになってしまいました。終わらないんです。何を答えても、“Why?”ですから。そうやっているうちに、考える楽しさというものに僕は気がついたです。

ただ、僕は独立してしまっただけです。独立したら、夕方になると、僕は日本から電話がかかってくるわけ。日本の朝ではないですか。結局、夜間のロースクールへ行かれなくなってしまったんです。だから、そこは、僕は中退です。でも、71歳の同級生は、彼が75歳のときに弁護士になりました。

僕はだいぶたってから、また、今度は別のペッパーダイン大学ロースクールに行き直しまして、そのときには早朝のクラスを受けるようにさせてもらったんです。それで、何とかロースクールを終えて、ニューヨークの試験が受かりまして、それで弁護士になったんです。

【神蔵】 どちらにしても、仕事と並行してやられていたんですね。大変ですね。

【幸田】 結構大変だったんですけど、すごい充実感があって、楽しかったです。

【神蔵】 そうですね。日本の大学であまり合わなくても、あちらに行って、対話型式というか、ゼミ型式で、すごくはまる方は、はまりますね。

【幸田】 そうですね。最初はちょっと戸惑うのではないかなと思うんです。どんどんあてられて、英語が下手だろうと遠慮しないですから、バンバンあててきて、変な答えをすると、みんなであっちから、こっちからも、質問が来るんです。質問というか、反論というか、めっちゃ袋だたきという感じなんです。

でも、それが最初、ものすごい違和感があったんですけど、半年もするうちに、やっぱりあれがおもしろいです。



知的刺激といいますか、それで、僕は勉強というものはおもしろいんだなとつくづく感じたんです。それをきっかけに、勉強大嫌い人間が、勉強大好き人間に変換してしまいました。

【横山】 そういう意味だと、今は、法科大学院で教えてらっしゃいますが、日本の法科大学院とはちょっと違う感じなんでしょうか。

【幸田】 そうですね。僕はできるだけアメリカで僕が体験した、そういう双方向のソクラテス・メソッド、あれを取り入れて、日本の学生にどんどん、どんどん質問しています。でも、僕は日本の若者をなかなかいいなと思っています。

【横山】 そうですね。法科大学院に行こうと思う学生は、それなりの志があるのでしょうか。

【幸田】 これもまたほんとうのことを言いますけれども、僕はずっと三十何年アメリカで生活しているうちに、時々、日本に帰っていたんですけれども、若い人と接触する機会がなかったんです。僕の場合、こういう法律の仕事をやっていると、相手はほとんどおじさんではないですか。日本の若い人と接触するというのは、テレビとか、新聞とか、週刊誌でしょう。見ていると、悪いやつばかり出てくるんです。いい子供を出しても、新聞やテレビはニュースにならないですから、しょうがないのかというのがあります。やっぱり僕は接触してなかったですから、ほんとう悪いやつばかりになってしまったと思ったんです。

それもあったので、僕は日本でロースクールができると聞いたときに、よし、僕は日本のロースクールで教えてやろうなどと思ったんです。それで、こっちに来て、教え始めたら、僕はびっくりしたんですけど、日本の若者はなかなかまじめです。まじめで、結構将来のことも真剣に考えているし、何だ、おれの若いころと同じではないかなと思って。

同じというか、僕の若いころよりもよっぽどまじめなんです。特に男の子がね。あれはびっくりしてしまつて。

【神蔵】 そうですか。

【幸田】 だから、僕は少し反省したんです。

【神蔵】 でも、今、同じような感じですよ。事務所も4月に新しい人が入るといふシステムではないので、事務の方とかも年が自分と近く、20代とか10代の方とあまり会わないので、同じです。ニュースとかテレビで出てくる若い方は、ちょっと変わったことを言う人

とかしかピックアップされないのです。

【幸田】僕はロースクールで、学生一人一人とよく話すんです。ロースクール以外でも、時々僕は学校で教えていますから、若い学生といろんなことを話し合いますが、結構まじめです。いや、僕はびっくりした。

やっぱり悪いやつの方が目につくじゃないですか。行儀の悪いやつとか。でも、大半は結構まじめです。

【横山】 そうですね。ある程度志を持つというのは、若い人の特権みたいところはありますね。

【幸田】 ちょっとおとなし過ぎるという感じは、僕はちょっと受けます。

【横山】 それはあるかもしれないです。卒をはみ出ないというのはあるかもしれません。

【幸田】 やっぱりちょっと安定志向になってしまうというのはあるでしょう。

【横山】 社会的にそうなってきたのでしょうか。

【幸田】 そうではないかなという気がします。

【横山】 多分、先生のころはまだ学生運動とかもあつたころでしょうから……。

【幸田】 ありました。もうばんばんやっていた。

【横山】 おそらく、ものすごく若者のパワーがあつた時代でしょうね。

【幸田】 あつたかもしれないです。

【横山】 我々のころは、もう大分そのパワーがなくなってきてしまつて、最近の若者はさらにないかもいれないですね。

【幸田】 だから、僕は基本的に日本の若者を気に入っています。これだったら、僕は一生懸命やろうと、そういう気になっています。だから、日本に帰ってきて、春、秋、教え始めたということについて、後悔は全くないです。

【横山】 なるほど。

【幸田】 あとしばらくやろうかなと思っています。

【横山】 ちょっと話は飛んでしまいますけれども、アメリカと日本とどちらが気に入ってらっしゃいますか。

【幸田】 それは、やっぱり僕は日本もアメリカも両方好きなんです。やっぱり違うよさです。違う悪さがありますけれども、日本は日本のよさは間違いなくあるし、アメリカには日本にないよさもあるので、どっちを選べというのは、ほんとう難しいです。当面、今、半々ですから。

【横山】 ちょうどいいのかもしれないですね。

【幸田】 これぐらいでいいかななどと思っているんです。

【森】 一番の違いというのは、学生とかでは何が違うんですか。

【幸田】 学生同士ですか。

【森】 はい。アメリカと日本で。

【幸田】 アメリカのほうが、多分、いわゆる敗者復活戦といいますか、1度失敗しても立ち直る機会がいっぱいあるんです。日本の場合には、1度外れると、落ちこぼれる的な、エリートコースから外れると、もう立ち直れない部分があるではないですか。アメリカのほうが、そういうチャンスは非常に多いです。

【神蔵】 気持ちが全然違いますよね。また、チャンスがあると思えるかで。

【幸田】 そうですね。あんまりチャンスがあると、気楽になってしまうのかもしれないですけども、日本の若い学生みたいに追い詰められた、そういう雰囲気、例えば、大学受験に失敗したから自殺するなど、アメリカでは考えられないです。そういう社会の構造の違いとか、そういうものは確かにあります。

それは学生に限らず、社会人になっても。

【横山】 起業家などもそうでしょうね。

【幸田】 そうです。

【横山】 日本ですと、ビジネスを始めて、失敗すると、なかなか再起できない雰囲気です。

【幸田】 そうですね。アメリカは、立ち直るチャンスというのは、いろいろあります。だから、ちょっといいかげんになる人ももちろんいますけれども、日本のほうが、そういう意味では、まじめに取り組んでいるという見方もできるでしょう。

ただ、僕などがつくづく感じるのは、日本にいますと、失敗してはいけないという意識がものすごく強いのではないかと思うんです。失敗しないで、成功するのが理想と思っているのではないかなと思うんです。僕は、それを理想と思ってないんです。失敗を重ねて、成功をしないと、本物の成功ではないと思っているんです。失敗しないで、成功だけを手に入れても、その成功はほんとう危なっかしい成功ではないかなと思って。

特に弁護士などというのは、失敗して痛い思いをして、それでないと、ほんとうに苦しんでいる人の気持ちはわからないではないですか。全部成功だけの、失敗体験のない弁護士などというのは、やっぱり僕はそれが理想とは到底思えないです。

だから、僕は自分自身も結構失敗してきていますけど、失敗を重ねてよかったなと思っています。これからも多分失敗すると思うんですけど、そう思うに至ったきっかけは、エジソンとの出会いです。エジソンを知れば、知るほど、彼は……、僕も、最初は、エジソンは天才と思っていたんです。ところが調べれば調べるほど、彼は天才ではないです。僕らと同じです。どんな人間でも、ある環境に置かれて、ある考え方をすれば、ああいうふうな力を出すという。つまり可能性は、だれでも持っているのではないかなと思っています。

【荒木】 お話しいただいて差し支えないような失敗談などありますか。

【幸田】 僕はいっぱいあるもの。

弁理士試験も、もちろん僕は失敗しているし、アメリカの弁理士試験、司法試験でも失敗して、僕は大体3回目で受かっているのかな。

僕は、それでよかったなと思っています。1回で受かったとしたら、そんなに残らないではないですか。しつこくやったから、結構忘れないで、身についたのではないかななどと、勝手に思っているんです。

【横山】 なるほど。そういう意味では、失敗ではないですけど、日本では、終身雇用制度ですから、大学を出て、一生同じ会社という方もかなりいらっしゃいます。しかし、弁理士試験を受験される方はある程度会社を勤めた方が再チャレンジという場合が多いですね。

【幸田】 そうですね。流動性はあるでしょう。

【横山】 アメリカでは、企業に例えば10年程度勤めて、この業界に入る方もいらっしゃるのでしょうか。

【幸田】 います。それはいろんな人がいます。ロースクールも、さっき僕が71歳と言いましたが、30代、40代は、ざらにいます。そういう人たちはいろんな経歴を持って、ロースクールに入ってくるんだと思うんです。

一方、大学を出て、そのままロースクールに入る人も、当然います。ただ、多様性とか、そういうものは間違いなくあります。

【横山】 そうですね。

日本だと、企業を辞めて、この業界に入るといって、ちょっと変わったという感じですね。

【幸田】 そういう感じはあるのでしょうか。

アメリカだったら、みんなそれぞれ違って、当たり

前なので、違っているということについて、あんまり抵抗感はないでしょう。日本にいたら、いい意味にも、悪い意味にも、変わっているというだけで、ちょっと特別扱いになってしまうではないですか。アメリカは、変わっているのが当たり前と思っていますから。

【横山】 そういう意味では、確かに終身雇用的な日本の制度というのは、ある意味、日本が硬直化しつつある理由の1つかもしれません。

【幸田】 そうですよ。だから、失敗は許されないみたいな。1度手痛い失敗をすると、もう立ち直れないという、そういうところがあるではないですか。

【横山】 それから、日本の社会は、失敗した人を責めるという文化がありますが、これがよくないという部分はあると思います。

【幸田】 だから、そのために、責任感が出てきて、まじめにやると、そういう一長一短だから、どっちがいい、悪いということとは言えないと思うんですけども、明らかに違いがあります。

【横山】 幸田先生の経歴についてのお話は、このあたりでよろしいでしょうか。この機会なので、米国の法律の話などエジソン発明品の話に行く前に質問があればお願いします。

【神蔵】 何年前ぐらいまでは、わりと留学したいなと思うこともありましたが。一般的に弁護士は1年ぐらい留学するチャンスが与えられるんですけど、弁理士はそういうチャンスがあまりないですね……。

向こうでロースクールに行かなければいけない。

【横山】 今からでも、全然問題ないのではないですか。

【幸田】 だって、71歳が行っているぐらいだから。

【神蔵】 そうですね。まず、語学から。

【横山】 最近は、事務所を変わって米国のロースクールに行く人もいるのではないのでしょうか。

【幸田】 ほんとういろんな可能性が出てきて、そういう意味では……。だんだん日本社会も柔軟性が出てきたのではないですか。

【神蔵】 なるほど。

【森】 弁理士登録の抹消で、申請抹消がありますが、最近その理由として、弁護士の登録をしたから、弁理士はいいやという人もいましたので。

【神蔵】 では、ちょっと英語から勉強して。

【横山】 そういう意味では、日本人はやっぱり1つの壁は英語ですね。



【幸田】 ああ、そうですね。

【横山】 私は若い頃英語をやっておかなかったために、英語が大変な壁です。特に話せないです。そういう人は多いと思います。

【幸田】 なるほど。

【横山】 先ほどおっしゃられたように、若い頃、英会話のレベルアップの努力をしないと難しいと思います。

【幸田】 それはそうですね。やっぱり大変だったです。日本では結構英語を勉強していったつもりだったんですけど、アメリカへ行ったら、周りは日本人は僕1人ではないですか。英語は僕1人が圧倒的に下手くそなわけです。だから、大変だったんです。

でも、あるところから、僕は、例えば弁護士でも一流の弁護士、わあ、すごいなという弁護士がいるのではないですか。そういう人を見ていると、彼らは法律が好きです。そういうところから、例えばピアノのうまくなる人、例えばイチローを見たら、イチローは野球が好きで、好きでしょうがないのではないかと思うんです。英語がうまくなる人は、英語の好きな人です。好きこそものの上手なれと、日本で言うのではないですか。

僕はまさにそのとおりだと思って、だから、僕は、英語をうまくなりたかったら、英語を好きになるので、だから、好きになるためには、もちろんある程度勉強しなければいけないんですけども、例えば僕などはプレスリーやビートルズの歌で英語を勉強したりとか、チャーリー・ブラウンという漫画が好きなんです。ああいうもので勉強したりとか、できるだけ楽しい教材を使って勉強したりとか、いろいろ工夫をしています。

【横山】 わかりました。

では、引き続き、エジソンの発明品についてお話をお伺いしたいと思います。

まずエジソンの発明品の収集をされているということで、収集をお始めになった経緯についてお教えいただけますでしょうか。

【幸田】 僕は特許の仕事をやっていますから、当然、トーマス・エジソンのことは、多少は知っていますよね。みんな、伝記みたいなものを読むではないですか。その程度の知識だったらあるんですけど、1977年に僕はコーダ & アンドローラという法律事務所をつくったわけです。そのオープン・パーティーがあったんです。そのときに、僕のアメリカ人の友達が、蓄音機をくれると言うんです。古いもの、実はそこに置いてあるんです。

これはトーマス・エジソンのつくったものだと言われて、ええっと僕はびっくりして、音がしないと思っていたんです。音がするから、やってみろと言われて、ぜんまいを巻いてみたら、ほんとうにすばらしい音がしたんです。わあ、すごいなと思って、僕はあのときほんとうの感動です。しびれたんです。

それから、骨とう品屋などで見る機会があって、2台目、3台目と買って見たんです。そうすると、みんなよかった。僕は、最初にもらったのが、たまたまよかったと思っていたんですけど、いろんなものを試したら、みんなよかった。それで、僕はエジソンに興味を持って、エジソンのつくった電球とか映写機とか、そこに置いてありますけど、トースターとかアイロン、ミシン、掃除機と、エジソンのつくったものをだんだん集めていき始めたんです。そうしたら、集めたもので、僕は後悔したことは1回もないです。もう100年以上たっていますけど、全部動きますし、それはほんとうすばらしいです。

それで、よし、おれはエジソンの発明したものを全部集めてやろうと。僕のパートナーのビルも、彼もエジソン気違い。2人でエジソン気違いになってしまったんです。競争で集めて、あっちこっちから集めてきて、最初は別にコレクションとか、そういう特別な意識は全くなかったんです。ただ、おもしろいから集めるというだけのことで、競争で集めて、集めて、そのうち部屋に入り切らなくなってしまって、倉庫を借りてきて、倉庫の中にしまって、今、僕は3,000点以上を持っていますけど、事務所に幾つか置いてあるではないですか。たまたま見に来た人がおもしろい、おも

しろいと言い出して、そういうところから、日本のテレビとか雑誌の人が来て、「何でも鑑定団」があるのではないですか。あれに僕のコレクションが出たんです。

そうしたら、すごい高い値段がついて、日本の玩具メーカーが博物館をやらせてくれと来て、それで、僕はものすごい安い金額で譲ったんです。そのメーカーが、実はある県で始めたんです。僕はその県が好きでも嫌いでも何でもないですけど、すぐに見に行けないではないですか。皆さん、知らないでしょう。エジソン博物館立派なものがあるんです。だから、僕はそれとは別に自分でやりますと言ったんです。東京か大阪か、みんなが見に行けるところで、エジソン博物館をやると思っています。そのために、また2番目のコレクションを集めて、これが今3,000点を超えています。

【横山】 最近、いろいろ地方なども回っていらっしゃるのでしょうか。

【幸田】 これは、NHKが協賛してくれて、2年ぐらい前から京都、札幌、静岡、仙台、今は福岡に行っています。

あちこちに回って、あとは2年ぐらいやるのではないですか。その後ぐらいに、どこかで博物館をやろかなと、今、思っているんです。

【横山】 やはり、お子さんなどが多く見に来られるのでしょうか。

【幸田】 そうです。おもしろいです。あれは、子供でも、大人でも、男でも、女でも、だれでも興味を持ちます。

わかりやすいんです。今の電化製品などは、チップの中に入って、どういう構造になっているか全然わからないではないですか。

【横山】 ほとんどエレクトロニクスになってしまいましたから。

【幸田】 そう。エジソンのものは、ぜんまいがあったり、ニクロム線が張ってあったり、目で見てすぐわかるんです。だから、子供たちが見ても、何だ、おれだって、できそうだなと、そういう元気が出るんです。天才と言っても、僕だってできるよ、これぐらいと、そういう感じになるんです。だから、僕はこの博物館をつくって、ガラスの中にしまって、遠くから見るのではなくて、誰でもさわって、自分でパンを焼いて、コーヒーをいれて、蓄音機で音楽を聞いたりとか、そういう博物館にしたいわけです。

【神蔵】 すみません、ちょっと初歩的な質問なんです

けど、その当時に最初に商品化されたものということなんですか。

【幸田】 そういう意味です。

【神蔵】 すごい。

【幸田】 エジソンは、全部で1,093件の特許を取っているのではないですか。商品化したものもいっぱいありますから、その商品を僕は全部集めてやろうと思っている。ほとんど全部集まっています。

【神蔵】 そうですか。

【幸田】 今、どうしてもなかなか手に入らないのが掃除機。

【神蔵】 ええ、掃除機もエジソンの発明なんですか。

【幸田】 電気掃除機。これは数が少なかったですから、ほとんどもう残ってないんです。

【神蔵】 そうですよ。

【幸田】 それ以外のものは全部集めました。

【神蔵】 どうやって探すんですか。

【幸田】 これはいろんなものが……。今、アメリカでは僕が集めているというのは、コレクター仲間では結構知られていますから……。

【神蔵】 連絡が来る。

【幸田】 しょっちゅう問い合わせが来るんです。こういうものがあるけど、どうだと。そういう中から、よさそうなものがあると。電話で話していると、大体どんなものか検討がつくんです。ほとんど壊れている。壊れているというか、もう何十年も屋根裏にほったらかしてあって、おじいさんが死んだら、何か変なものが出てきたという場合があるわけです。ヘンリー幸田という日本人の弁護士が集めているから、電話しろということになって、それでかかってきて、電話で話すと、直せるかどうかというのは、ぼくはもう勘でわかるわけです。

そういうものが10点、20点あるということになると、僕はそこまで見に行くと、よければ、まとめて買ってくるんです。

【森】 本物とか偽物というのは、やはり何か見分けるポイントみたいものがあるのでしょうか。

【幸田】 これは、僕はもう長年集めていたので、絶対間違えません。すぐわかります。最初はだまされた。そういう失敗もあるわけです。

【森】 日本だったら、そういう人が出てきそうな気がしましたので。

【幸田】 それは確かにあります。でも、それはある程

度さわってれば、本物、偽者とすぐわかります。

【横山】 3,000点にもなりますと、どこに置かれているのでしょうか。

【幸田】 ロスの場合には、もうほとんど倉庫です。

日本の玩具メーカーに譲ったのは、全部で2,600点なんですけれども、それはある県のオモチャシティというところで、彼らは大きなビルを持っていて、そこでやっています。結構いい博物館になっているんですけど、その県以外の人は行かないのではないですか。

【森】 そうですね。

【幸田】 僕は日本の子供たちに見るだけではなくて、さわって、そうすると、ほんとうすごいヒントになります。

あ、そうか、こうなっているのかというのは、見るとすぐわかります。

【横山】 そういう子供たちからエンジニアが出てくるとよいですね。

【幸田】 そう。日本から第2、第3のエジソンを育てるとというのが、僕の今の夢というか。

【横山】 そうですね。日本の子供たちは、最近、理系離れが進んでいるようですし。

【森】 そうですね。

日本だと、どうしても発明というのは、企業がやるというイメージが多分強いと思うんですけれども……。

案外、家庭の主婦なども役立つものを出していたりとか、そういうヒントがやっぱりあって、それで、自分がどうやろうと考えることが大事だと思います。エジソンの発明品などを見て、小さい子供から夢を持って、いろんな発想をしてくれれば面白いと思います。

【幸田】 そうです。あれはNHKが地方を回り始めたのが、一番最初は松戸なんです。今から二、三年前ですか。松戸市というのは、マブチモーターなどがあって、結構技術的にはレベルが高いんです。町の技術系のおやじさんが、工場のおやじさんが集まって、松戸市の子供たちを集めて、松戸市で発明教室というのをやっているんです。松戸市が多分後援して、みんなボランティアで来て、子供たちにハンダづけを教えたり、ラジオを組み立てたり、いろんなことをやっているんです。

そうすると、いろんな子供たちが集まってくるわけですが、1人、とにかくいたずら小僧で、ほんとうにわんぱくな子供がいたんですって。小学校5年生か、

そこらで、その子供が来て、もういたずらばかりしていたんです。ところが、何かのきっかけで、おもしろい発明をしたんです。それを見ていた松戸市の工場の人が、これ、おもしろいじゃないの、うちの会社でこれを商品化したいと。ついては特許を出そうということになったわけです。松戸市が後援してくれて、特許の出願料を松戸市とその工場が負担して、その子供の名前で特許を出願したんです。

そうしたら、その子供がびっくりしてしまって、僕がやったことが特許になると言っ、その子供にとってはすごいショックだったんだ。その子供はめちゃくちゃに成績が悪かったのが、学校で1番になってしまったんです。実際、そういうことが起きていますから、だから、人間の可能性というのは、どこにあるかわからないです。

もし彼がそういう機会がなければ、単なるいたずら小僧でもって、エリートではない、落ちこぼれ的な方向で行ったのではないかと思うんですけど、ああいう経験があったために、彼はころっと変わってしまって、学校1番ですって。

【横山】なるほど。

もし、お差し支えなければ実物を見せていただけますでしょうか。

(コレクション紹介)

【森】このエジソンの写真はよく見えますね。

【幸田】そうですね。

【神蔵】ハンサムですよ。

【幸田】ここから説明します。

これがコーヒーマーカーです。

これはワッフルを焼く機械。

こっちが、僕が最初にもらった



もの。これは1880年代の蓄音機なんですけど、今、音を聞かせてあげます。

これがそのころのレコード。



【神蔵】これが？

【幸田】うん。

【神蔵】この溝が？

【幸田】蠟管というんです。

【横山】ああ、それがレコード。

【荒木】ここが鳴っていたんですね。

【神蔵】溝を読んでいくんですね。



【幸田】エジソンの初期のレコードは円筒形で、シリンドラー型と呼ばれています。30年後に他社が円盤型を出して、こっちが主流になってしまったんですよ。

円筒形だと、重ねると、場所をとるではないですか。それで、重さがかかると、壊れてしまったりしますから。

【神蔵】こういうふうに売っているんですか。

【幸田】そう。

これなどは、炭鉱夫のランプです。これがアルカリ電池なんです。



アルカリ電池などは新しいと思うと、そうではない。エジソンの発明です。これは4時間充電できて。

これはラジオでしょう。

これはものすごく珍しいんです。これは電話なんですけど、電話というのは、実は、送話機の部分はエジソンの発明なんです。受話器のほうは、グラハム・ベルの発明なんです。



ある時期に、エジソンは、送話器のpatentをグラハム・ベルに全部譲ってしまったんです。だから、電話はベルの発明ということになって

いるんです。でも、実は合作なのね。だから、電話にエジソンという名前は、普通、ついてないんです。ついているのは、ほとんどない。ここにエジソンと書いてあるんですけど、実はこれはイギリス製なのね。だから、特別にできた。

これを、今、電話線につなげるでしょう。これで電話を話せるんです。うちはIT電話にしてしまっているから、つながらないですけど、普通の家だったら、これで今でも話せます。

これはヒーターです。

【荒木】あんまり今のものと変わらないです。

【神蔵】ハロゲンヒーターみたい。

【森】そうですね。ハロゲンヒーターは、こんな感じですよ。

【幸田】これが京都の竹を使った電球なんですけど、今ちょっとつけてみましょう。1880年ごろに作られたものです。



【神蔵】あ、竹。えっ、電気がつくんですか。

【幸田】 うん。

チカコさん、ちょっとここの電気を消してくれない？

【横山】 これはランプが切れてしまうと終わりですか。

【幸田】 うん。終わりです。これは壊れたら、おしまい、直せないです。

だけど、400時間もちます。

【森】 あ、ついた。

【神蔵】 あ、すごい。

【幸田】 いい明かりでしょう。

【神蔵】 いいですね。

【幸田】 温かい明かり。もっと電圧を上げれば、もっと明るくなるんですけども、今、これで60ボルトぐらい。温かい明かりでしょう。

あの馬蹄形になっている細い線があるでしょう。あれがフィラメント、あれが京都の石清水八幡宮でとれた竹なんです。

【神蔵】 竹なんですな。

こんなに明るくなるんですね。

【幸田】 うん。明るくなる。

【神蔵】 へえ。

【横山】 中にはガスが注入してあるのでしょうか。

【幸田】 最初は真空でした。後から窒素になった。

【森】 よく抜けないものですね。ガラスで封止してあるからでしょうが。

【幸田】 チカコさん、電気をつけてください。

これは録音再生機なんです。これは蓄音機ですけど、蓄音機というのは、再生機ではないですか。どこかで録音したものを。これは録音して、自分で再生する。ディクタフオンの一番初期のものです。

【荒木】 テープレコーダーみたいなものですね。

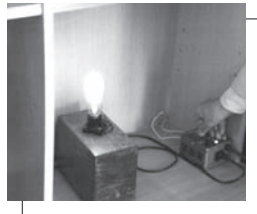
【幸田】 そう。ここにいわゆる蝋管を入れて。

【神蔵】 しゃべったりとかするんですか。

【幸田】 そう。

【神蔵】 あ、そうなんですか。

【幸田】 ここにあるのは、エジソンのアイロンですよ。



これはカメラなんですけど、カメラはコダックなんで

すけれども、エジソンが映写機を発明したではないですか。

そのときに、フィルムをつくってくれたのが、コダックなんです。彼らはすごく仲よくやって。これはエジソンの設計です。

これはさっきの……。

ワッフルです。

これは……。

【神蔵】 ヘアアイロンですか。

【幸田】 うん。パーマメント用です。今のものと変わらないでしょう。

【神蔵】 変わらないです。

【幸田】 これは電気式のアイロンです。



これはガリ版、僕らが子供のころ、これで宿題やった記憶があります。

これはエジソンの発明ではなくて、エジソンが使っていた電報です。

これは、おもしろいです。ヘンリー・フォードのために作った、自動車のスパークプラグです。今のものと変わらないでしょう。

【神蔵】 あ、ちゃんと Edison というブランドでやっていたんですね。

【幸田】 そう。この謄写版だって、Edison なんです。

【神蔵】 ほんとうだ。へえ。

【幸田】 エジソンというのは、全部で会社を150つやっているんです。

一番有名なのは、GEです。

エジソン・ゼネラル・エレクトリック。

【神蔵】 この写真は何ですか。

【幸田】 これはエジソンの写真です。

【神蔵】 あ、エジソンの写真ですか。

【森】 ヘンリー・フォードと。

【幸田】 ヘンリー・フォードとは、ほんとうに仲がよかったんです。

【神蔵】 へえ。

【幸田】 もう一つ、音を聞かせてあげます。もっとこう進化した。



うん、これが円盤型になったものです。

【神蔵】 これはそれ用のレコードでない、だめなんですか。



【幸田】 そうです。これは80回転といって。僕らが子供のころは78回転というのがあったんですけど、その前の世代です。こう温かい、いい音をしているでしょう。

【横山】 これはちゃんと増幅させて、ここから出ているんですよ。

【幸田】 そう。ここのスピーカーがここ内蔵されているんです。

うん、外づけの。

【横山】 だけですよね。これは音を出しているだけですよね。

【幸田】 そう。

【森】 こっちは電氣的に増幅しているのでしょうか。

【幸田】 いや、これは電気は使ってないです。

【森】 回転のところだけ電気を使って。

【幸田】 いや、これはゼンマイです。

【神蔵】 へえ。すごい。

【荒木】 電気は使ってないのでしょうか。

【幸田】 これは全然使ってないです。

【荒木】 電気を使わなくて、随分こんなに大きな音になりますよね。

【幸田】 ねえ。いい音をしているでしょう。

【横山】 ええ。びっくりしてしまいました。

【幸田】 これはいやし効果があるでしょう。

【神蔵】 癒されますね。

いいな。

【森】 いや、おどろきました。こんな大きい音が出るとは。

【幸田】 うん、こういうものが全部で3,000ありますから。

【神蔵】 これは、デザインはエジソンですよ。

【幸田】 そうです。

【神蔵】 そうなんですか。

【幸田】 彼はほんとうは結構、意匠にも関心を持っていました。これなどはギリシャの優勝カップから来ているものです。ギリシャ文化に魅力を感じていたんです。

【神蔵】 すごくデザインもすてきですよ。

【幸田】 これはラジオで、テレビは、エジソンの発明したものではないですが、このホットポイントという会社はエジソンのつくった会社なんです。

【神蔵】 そうなんですか。かわいらしい。

【幸田】 これはラジオ。

【神蔵】 そうなんですか。デザインまで。

【幸田】 そう。このコーヒーマーカーもトースターも、僕はいつも使っています。

【神蔵】 えっ。

【幸田】 ワッフルだってできます。

【荒木】 エジソンは商標とかも取ってらっしゃるんですか。

【幸田】 エジソンは、知財は結構しっかりしていて、特許は全部で1,093件持ってました。

(コレクション紹介終了)

【幸田】 今、ご覧になって、エジソンの発明品というのを、あんまり身近で見る機会はないと思うんですけど、見ると、よくできているでしょう。もう百何年もたって、コーヒーマーカーでも新しく見えるでしょう。メッキが全然はげてないです。

【神蔵】 そうですね。

【横山】 100年使えるように作ってあるのですね。

【幸田】 ええ。ぼくは、最初、ずっとこれを集めていったんです。70年代から始めて、80年代に集めて、80年代の途中から、僕はエジソンの発明品を集めるというところから、トーマス・エジソンという人間に興味を持ったんです。だから、そこから、先はずっと発明品のコレクションが目的というよりも、エジソンはどんな人だったんだろうなというのを調べるほうに、僕の興味がそっちに行っただけです。

調べれば、調べるほど、彼は天才ではないです。さっきちょっと言ったんですけど、エジソンというのは、失敗というのは何とも思ってないんです。

【横山】 エジソンが最初に発明したものは何でしょうか。電球でしょうか。

【幸田】 いや、彼は投票機。

【横山】 投票機？選挙の投票機でしょうか。

【幸田】 そう。イエス、ノーというのを、みんなカードを出して、集計していたではないですか。あれをイエス、ノーのボタンを押すと、ぱんと一度に集計されるというのを考えたんです。

あとは、ユニバーサルプリンタといって、為替のいろんな動きがあるではないですか。相場というのは電

報で送って、それを筆記していたものなんです。それを向こうから送ると、自動的にそれが数字になって出てくるというプリンターです。これが、23歳のときに、彼が一番最初に成功した発明で、今の金銭価格だと8億円で譲渡しました。

普通だったら、8億円もうかって、それで、何かに投資してと思うではないですか。彼は投資したけど、新しい発明に投資して、どんどん続けて。

多分彼は失敗を嫌がってなかったから、成功したと思うんです。例えば電球を発明したときに、1万回以上、彼は失敗しているんです。フィラメントがなかなかいいものがなくて。電球はエジソンが発明したと言っているけど、コンセプトはイギリスの Swan という人が、エジソンより30年前に、もう発明しているんです。ところが、すぐ切れてしまうから、商品化できないでいたんです。だから、花火みたいなものという感覚だったんです。

エジソンは、これは照明器具になると思ったんでしょう。だから、そのころの照明器具というのはランプとかロソクではないですか。ものすごくおくらえています。それに対して、電球が商品化できたら、すごいではないですか。それで、彼は電球のフィラメントに取り組んで、いろいろなものを試して、試して、途中から炭素がいいと気がついたんです。熱を通じると、光るではないですか。あれは燃えているわけです。あれが長時間もつような素材を探して、あとは人間の髪の毛とか、綿の糸とか、クジラのひげとか、カメの甲羅、象の皮膚と、とにかくいろいろなものを集めてきてやって、みんな失敗して、失敗して、失敗して、1万回失敗したときに、彼の助手が、ミスター・エジソン、あなたは1万回も失敗してあきらめないのかと言ったら、そのときの彼の答えが、「おれは1回も失敗していない」と言うんです。「1つ1つ、こうやってはだめだということを見つけた」というわけ。

彼は、実は1万4,000回目に成功しているんです。そのときの成功するきっかけになったのが、いわゆる京都の竹なんです。あれは、おそらく日本から来た人が……。エジソンというのは、1877年に、電球の前に蓄音機を発明しているんです。世界で特別有名な、今で言うビル・ゲイツみたいな存在になってしまったわけです。日本からもいろいろなお客さんが来たんです。その中には渋沢栄一とか、野口英世とか、御木本幸吉とか、いろんな人が来ていたんです。多分、渋沢栄一

ではないかと思うんですけど、扇子を使っていた人がいたんです。エジソンはそれを見て、ヒントだったんです。

彼が探していたのは強い素材なんですけど、強いというのは、硬いという意味ではないんです。しなやかなものを探していたんです。竹というのは、まさにそうではないですか。日本にはいい竹がありそうだったので、彼は忙しいから行かないんですけど、明治11年、助手を日本に送ったんです。そのときに、伊藤博文さんが会っているんです。もうエジソンというのは、超有名な男だったんですけど、その助手が日本に来て、竹を探している。伊藤博文が会って、京都府長を紹介したんです。エジソンの助手のムーアさんという人が京都まで行って、京都に石清水八幡宮という神社があるんですけど、その周りが竹の名産地なんです。そこに行って、竹を調べて、確かに見事なんです。僕も行きましたけど、男山という小さな山があって、その周りにずっと竹やぶなんですけど、ものすごく立派な。

その中の節で数えると、下から4番目と5番目の間が一番しなやかなんですって。それで、ムーアさんはその辺の竹を買い集めてきて、下から4番目と5番目の節を切って、それをニュージャージーに送ったんです。それで、電球ができたんです。だから、日本とも、ものすごく縁があるんです。

僕が個人的に興味を持った一番最初が、この失敗です。失敗したっていいんだよというのが、それまで失敗しては、だめ、だめ、だめと、そういうふうに僕は育ってきたんですけど、失敗してもいいよ、失敗しなければ成功できないよというのは、すごい僕は気が楽になったんです。それで、僕はますますエジソンに興味を持って、そうしたら、出てきたのがお母さんなんです。エジソンというのは、小学校を3カ月で落ちこぼれになったではないですか。

【横山】 ええ。あります。

【幸田】 あのとときのきっかけというのは、小学校の先生が1足す1は2だよと言うではないですか。そうすると、みんな、はいと言う。エジソンだけ、”Why?”と言うわけです。なぜだ、なぜだと言われて、1足す1は2に決まっているではないかというのが普通の小学生。エジソンは、ここにコップが1つあって、ここにコップが1つあって、もう一つコップに水を注ぐと、1足す1が1になります。粘土の塊を両手に一つずつ持ってそれらを合わせると、1足す1は、1になります。

お皿を落っことすではないですか。10個のかけらになったのを、糊でくっつけていくと、1足す1足す1、10回足すと1になってしまう。1足す1は2でないかもしれないというようなことを言うわけです。

先生、空はなぜ青いのか、なぜリンゴは赤いのか、なぜ種がアサガオの花になってしまうのか、そういうことを、なぜ、なぜ、なぜ、と聞いて……。好奇心の強い子供だったんでしょう。それで、先生とけんかになってしまって、出て行けということになってしまった。

落ちこぼれたのを引き受けたのが、お母さんです。お母さんは教えるのではなくて、一緒に考えてあげたんです。風はどこから吹いてくるんだろうね、なぜ鳥は飛べるんだろうね、なぜ人間は飛べないのかね、魚はなぜおぼれないんだろうと言って、そういうものを子供と一緒に考えてずっと考えたのではないですか。だから、エジソンは考える楽しさというのを、子供のころに身につけたんだと思うんです。

エジソンが1日3時間しか寝なかったとか、4時間しか寝なかったと言うじゃないですか。あれは発明が好きで、好きでしょうがなかったんです。決して努力家だからやったのではなくて、僕はずっと調べて、それは確信あります。人間というのは、好きなことをやるじゃないですか。松井だって、イチローだって、野球が好きでしょうがないんです。

だから、そういう育ち方をすれば、人間というのは、いろんな可能性が出てくるのではないかなと思って、決してエジソンは天才ではないかと、僕は知れば知るほど、そう思いました。

もう一つ、エジソンのことで気に入ったのは、彼はハンディキャップという発想がないんです。彼は学校へ行けなかったではないですか。耳も悪いです。子供のころに鉄道でアルバイトをやっていたんです。そのときに機関車を追いかけて行って、乗り損なって、機関手が助けようとして、引っ張って、引っ張り上げたんですけど、頭を引っ張ったんです。そのときにかむところがなくて、耳をつかんだんですって。ぎゅうっと上げたら、ぷつんと音がしたと、日記に書いたんです。エジソンは、その後、左の耳は全然聞こえなくなって、右の耳もだんだん聞こえなくなってしまって、つまり、難聴なんです。

エジソンは記者会見でよく質問されるんです。あなたはなぜ世界最高の発明家になれたんですかと聞かれ

ている。彼の答えはおもしろいです。おれは学校へ行けなかった、学問がなかった。だから成功したと答えたんです。説明しないんです。自分で考えろということでしょう。

僕はその記事を見ていて、あれっと思ったんです。学問があるから成功した、学問がないから失敗したというならわかるんですけど、学問がないから成功したというのは、ちょっと不思議ではないですか。いろいろ考えているうちに気がついたのは、例えば、物がここにあって、もう一つ物があって、これを結びつけるとどうなるのかという。もし教育があれば、おそらく頭で考えて、こうなるだろうと推察して、それでおしまいではないですか。

エジソンは、おれは学問がない、教育もない、やってみなければわからないではないかと、全部やってみようんです。そうすると、100回に1回か、1,000回に1回かわからないけど、思いもよらないことが起きるんですって。それが彼の発明なんです。やってみなければわからないではないかと。

もう一つは、エジソンが蓄音機を発明したときに、何であなたは蓄音機を発明できたんですかと、もう何回も聞かれているんです。彼の答えは、おれは耳が悪かった。だから、発明できたと答えたんです。これまたおかしいではないですか。耳がいいから発明できたというならわかるんですけど、彼の場合、耳が悪かったから、おれは蓄音機を発明できたと、みんなきよんとするわけです。彼はそれ以上、説明しないんです。

僕は自分で考えてわかったのは、彼は音楽が好きなんです。かすかに聞こえるんです。ピアノなどを弾いてもらおうと、もうピアノのそばに行って、抱きついて聞くんですって。かすかに聞こえるんです。あるとき、ピアノのふたがあくでしょう。あそこにかみついたんです。そして、ダダダダーンとやって、そうしたら、歯ががたがたと震えて、それが頭に音になって響いたんですって。そのときに彼は、音は振動だということに気がついたんです。

僕らは、高校の教科書に出てくるではないですか。知識としてはあるんですけど、エジソンの場合には体で感じているんです。振動というのは、地震計みたいに記録にとれるではないですか。振動を記録にとって、その記録の“あと”を、なぞっていけば、振動が再現できる。振動が再現できるということは、音が再現で

きるに違いないと、彼は見当をつけたんです。そこからスタートして蓄音機を発明したんです。

だから、おれは耳が悪かった、だから、蓄音機を発明できたというのは、彼の本音なんです。そのとき彼が言っているのは、おれにはハンディキャップという発想はないというわけ。つまり、もしハンディキャップがあるとすれば、それはほかの人との違いだから、生かせば、特長になる。ハンディキャップは特長なんだよと言っているんです。

普通だと、ハンディキャップは苦痛ではないですか。ところがエジソンの生き方には、ハンディキャップという考えがないのです。ハンディキャップを特長にしてしまうのです。それを知ってから、僕はエジソンという男にもすごい興味を持ったんです。それで、今でも僕はエジソンの作ったものを集めて、それを日本の子供たちに見せてやろうと思っているわけです。

【森】 ただ、先ほどお話があった日本の教育ですと、なかなか失敗をよしとしないといえますか、先ほどの会社などもそうですが、学生も失敗をしたがらないという話がありましたけど、そこら辺が今の日本の教育とかとはちょっとギャップがあるような気がします。

【幸田】 そうですね。やっぱり僕はつくづく感じますけど、失敗して、それに基づいて成功するというのは、一番本物の成功ではないかと思うんです。失敗しないで、成功するというのは危ないです。例えば、転んだことないまま成長した子供が転んだら、大変でしょう。

【森】 ノーベル賞の田中さんも、確か間違っって混ぜたのを使用して成功していると聞いたことがあります。一般的には混ぜないものを混ぜてしまい、そのものを使って測定したら、確かうまくいって、あの発明が見つけられたという話を聞いたことがあります。そういう意味ですと、案外、失敗は、ほんとうに成功のもとかなという気が致します。

【幸田】 そう。いっぱい失敗して、すそ野が広いから、大きなものが育つので、もう失敗を一切しないと、仮にたまたま成功したとしても、それはほんとうにもろいのではないかなと僕は思っています。

【横山】 10年ぐらい前に、失敗学というのが日本で流行ったんですけども、その中でもそのようなことが書かれていました。

【幸田】 そうということだと思います。

【横山】 そこで言われているのは、若いエンジニアのうちに、小さい失敗を経験しておかないと、大きな失

敗をする。だから、若いエンジニアに失敗を経験させるのが、大きな事故を起こさないために必要だということでした。

【幸田】 そうですね。やっぱり失敗しながら、だんだん納得して身についていくので。エジソンのことを知れば、知るほど、気が楽になります。あ、何だ、失敗してもいいのかと。

そういうことなんです。

【神蔵】 ちょっといやされました。

【横山】 そう。出願してしまったら、終わりですから。後で失敗したというようなものはたくさん。

【神蔵】 何でエジソンなんだろうなと思っていたのが、すごくよくわかりました。

【幸田】 あ、そうですか。見ると、納得するでしょう。

【神蔵】 そうですね。

【幸田】 もっと見たくなるでしょう。そのうち博物館を創ります。

【横山】 これらは、もう100年位経つものではないか。



【幸田】 そうですね。蓄音機などは、発明は1877年なんです。電球が1879年。

僕はエジソンを見ていて感じるのは、彼は、おれはインベンターだ、サイエンティストではないと言っているんです。

日本では、インベンターとサイエンティストは結構重なってしまっている。エジソンは完全に分けたんです。世の中の人々が欲しがっているものを提供するの、おれの仕事だと。サイエンスの進歩、これはサイエンティストがやればいいと。彼はものすごく割り切っているんです。今、世の中が何を欲しがっているのか。

だから、すごいのは、1879年に彼は電球を発明したでしょう。すごいものができたわけです。ローソク

とかランプとか比較にならないようなすごいものが。ところが、あんなものは売れないんです。というのは、家に電気がないから。あんなものを買って、家に持って帰ったって、何にもならないではないですか。

彼は次に何をやったかという、電気を起こすのに、ジェネレーター、つまり発電機を発明したんです。ジェネレーターはものすごく高いです。そのころの家1軒と同じぐらいの値段がしたんですって。それではだめではないですか。彼は安い電力をつくらなければいけないと思って、ナイアガラに目をつけたんです。つまり、水力発電。ダムをつくらうと。個人ですよ。

ダムをつくるといっても、そのころセメントはあったんですけど、ものすごく弱いんです。ダムは何メートルという幅のものをやるわけではないですか。強化セメントを発明したのは、エジソンなんです。今、我々が使っているセメントというのは、エジソンの発明なんです。だから、無機化学を勉強して、強化セメントを発明してしまった。

ところが、今度はダムをつくるためには、労働者が何年も何万人もという人がいるわけではないですか。それで、彼が次に発明したのが、ベニヤ板です。小屋をつくるから。ついでにガムテープも発明したし、合成ゴムも発明した。

電気ができて、今度は送電の問題になったんです。そのころは銅線はあったんですけど、周りは布を巻いていたんです。こんなものは雨が降ったり、雪が降ったりしたら、おしまいではないですか。そのころまだゴムの木はアメリカになかったんです。ブラジルからゴムの木を持ってきて、フロリダでゴム園をつくって、ゴムを栽培して、それで、ゴムの絶縁体ができたんです。

だから、発電機を発明して、強化セメントを発明して、ベニヤ板を発明して、ゴムの絶縁体を発明して、その次に来たのが、今度は高速道路なんです。えっと思わないですか。高速道路の発明はエジソンなんです。あれはセメントが余ったんです。ちょうど自動車伸び始めた時期ではないですか。ヘンリー・フォードと仲よかったでしょう。それで、フーバー大統領という人に、ハイウエー構想を提言したのはエジソンなんです。実際にそうだったではないですか。ヤンキー・スタジアムとか、エンパイア・ステート・ビルとあるんですけど、あれもエジソンセメントでつくったんです。だから、エジソンのおかげで、世の中はほんとう

に変わったと思うんです。

【神蔵】 それもすべて電球をつけるために1つにつながって。

【幸田】 そう。それで、電力というのは安くしないと意味がないんです。ですから、電気式のミシンとかトースターだとか、アイロンだとか、ああいうもの、電化製品をつくったのはエジソンです。みんなが電気を使っているようになれば、電力は安くなるわけではないですか。

【横山】 今考えると、電球というのはすばらしい発明です。それまではガス灯だったものが明るくなったわけですから。

【幸田】 何の安全な、それも結構安くできるようになったわけです。

【横山】 どこの家も明るくなって。

【幸田】 エジソンのおかげで、世の中はほんとうに変わったもの。その1人の男が、それも学校へ行かなかった子供が、耳の悪かった子供があそこまでやって、それで僕は彼に興味を持ったんだ。

【神蔵】 1個だけではなくて、こんなにもいっぱいものものに次々ひらめいて、すごいですね。

【幸田】 ね。だんだん、僕はエジソンのことを調べていって、そんなエジソンは実は天才ではない。僕と大して変わらない、普通の人間だというのに気がついて、僕はますます好きになったんです。

実は、僕の次のターゲットはレオナルド・ダ・ヴィンチなんです。エジソンはダ・ヴィンチを尊敬しているんです。ダ・ヴィンチはアルキメデスを尊敬しているんです。だから、僕の次のターゲットはダ・ヴィンチ、その次はアルキメデス。やることはいっぱいあるんです。



ダ・ヴィンチというのは、もうほんとうの天才ではないですか。絵もすごいし、発明もすごいし、解剖だとか、彼は音楽もやるでしょう。プロですね。もうほんとうの天才ではないかと、僕は今、思いますけれども、調べれば、お

そらく彼も天才ではないと気がつくのではないかなと、僕は期待しているわけ。

今、ダ・ヴィンチというのはほんとうの天才と、世界じゅうでそう思い込んでしまっているのではないです

か。でも、さかのぼってみると、ダ・ヴィンチという人は、嫉妬深い人だったんですって。あのころはミケランジェロに嫉妬しているんです。何か人間臭いではないですか。

【神蔵】 でも、そういう原動力はすごいかもしれないですよ。

【横山】 エジソンは、ちょうど時代に合ったというところもあるかもしれませんね。

【幸田】 ありますよ。それはありますよ。

【横山】 今の時代だと、ここまで広範囲なものを発明するというわけにも、いかないだろうし、ちょうど電化製品とか、発電機を含む電力のインフラを整備しつつあるところに、嵌ったのでしょうか。

【幸田】 おそらくそれはあるでしょうね。

僕らの特許制度も、それに当然関連していて、リンカーンが1865年に南北を統一して、彼は特許法を強化すると言った人ではないですか。あそこから、アメリカの第1期プロパテント時代は始まっているわけです。エジソンは18歳だったんだね。ちょうどエジソンが成人になるときに、特許、特許と、そういう時代になったんです。

だから、グラハム・ベルも出てきたし、ライト兄弟も出てきたし、いろんな人が一斉にあの時代に育っています。そういう点では、ほんとうにエジソンというのは、タイミングがよかったのではないですか。

【横山】 そうですね。今で言うと、ビル・ゲイツのように時代みたいなもの。

【幸田】 うん。

【横山】 ちょっと境遇は違うと思いますけれども、アメリカはそういう人が出てくる土壤があるのでしょうか。

【幸田】 そうですね。

【横山】 日本ではなかなかそういう人は出てきませんね。

【幸田】 個人でね。

【横山】 個人で1つの事業を立ち上げるというのとはできないというわけでもないでしょうが、あんまりないような気がします。

【幸田】 いないですね。

【横山】 しかも、技術者というか、発明者というか、として、1つの事業を立ち上げていく人というのは、あんまり日本ではいいですね。

【幸田】 あんまりいいですね。

【神蔵】 先生は、お休みの日にエジソン研究をされているんですか？

【幸田】 そうですね。

【神蔵】 お忙しいですね。

【幸田】 夜とか、ちょっと時間ができたときに、エジソンのことをいろいろ調べて、楽しいです。あれはもう趣味ですから。

【神蔵】 やっぱアメリカのほうが、そういう文献が多いですか。

【幸田】 やっぱエジソンはアメリカで生まれて育った人ですから。

何とか日本の若い人たちにエジソンのことを知ってもらいたいと思ひましてね。

【神蔵】 そうですね。

【横山】 最近の若い人はあんまり知らないかもしれないですね。名前は知っているかもしれないですけど。

【神蔵】 やっぱ本とかで見て。

【横山】 昔は、エジソンというと、伝記の中の代表のようでしたけどね。

【幸田】 そうですね。

【横山】 今は、そうでもない。

【神蔵】 今も小学生とかは見ているのではないですかね。

周りにいないので、わからないんですけど。

【幸田】 ね。ただ、本を読んでいるだけではなくて、こういうものに接すると、納得するじゃないですか。

【神蔵】 そうですね。

【幸田】 おれもやってみようという気になるじゃないですか。

【神蔵】 ええ。

【横山】 あの蓄音機がすばらしかったです。あの音が、あんな大きい音が出るとは思わなかった。

【幸田】 あの音はすばらしいでしょう。

【横山】 ええ。

【幸田】 温かいですよ。

【横山】 しかも電気を一切使っていないというのが。

【神蔵】 全部シンプルですよ。

【幸田】 そう。そうですね。

【横山】 だから、壊れないのでしょうか。

【神蔵】 今あるものは、ぱっと見ても、わりと何がどうなっているか全然わからないけど、物を見て仕組みがわかると、ほんとうに。コロンブスの卵になってしまえますけど、何か、ああ、身近な感じ。

あ、なっているんですか。

【幸田】 どうですかね。

エジソンのトースターなどは、僕は今でも毎日のように使っていますけど、もう 100 年たっているけど、あと 100 年使っても。

【横山】 そうでしょうね。

【幸田】 使えるのではないかという気がしています。

【横山】 ヒーターさえ壊れなければ、使えそうです。

【幸田】 そう。

【横山】 永久に使えそうです。

【幸田】 そうですよ。

【神蔵】 へえ。おうちの中にもいっぱい使っているものがあるんですか。

【幸田】 ええ。大学の研究室にも置いてあって、学生がしょっちゅう来て、コーヒーをいれて、トースターでパンを焼いて食べています。

【神蔵】 えっ、そうなんですか。

【横山】 あのトースターのパンは食べてみたいです。

【幸田】 いいですよ。お出でいただければ、お安いご用ですよ。

【横山】 それから、ワッフルを焼く機械で焼いたワッフルはおいしそうですね。

【幸田】 ワッフルも結構うまいものですよ。

【神蔵】 あれも使えるんですか。

【幸田】 使えます。いいですよ。今度いつか自分でくってみてください。

【神蔵】 へえ。

【幸田】 僕はそういう博物館をつくりたいなと思っているんです。

【横山】 そうですね。自分でパンを持ってきて、焼いて食べられたらおいしいですよ。ワッフルを焼けて。

【幸田】 楽しいですよ。

【横山】 では、ほかに何か質問はありますか。

【荒木】 あそこにはないので、ほかにはどういったエジソンの発明品がありますか。

【幸田】 あそこには、例えば映写機を置いてないですよ。さっき言った掃除機も置いてないですし、あとはバッテリー関係があんまり置いてないです。自動車用のバッテリーだとか、電気自動車のバッテリーをつ

くったですから。

【荒木】 当時から電気自動車用のバッテリーというこ
とでやったんですか。

【幸田】 そうです。彼らは電気自動車をつくったんで
す。

【横山】 硫酸系のバッテリーでしょうか。

【幸田】 そうです。

【荒木】 当時、実用化まではいってない？

【幸田】 一部やっていたんですけども、あのころ、
やっぱりガソリンのほうが安かったではないですか。
やっぱり公害という意識もなかったですから。

【横山】 しかし、当時の電池の性能では、ガソリンの
方が良かったのでしょうか。

【荒木】 ようやくというところですから。

【幸田】 今ね。

【横山】 掃除機は見てみたいです。

【幸田】 ええ。

【荒木】 見てみたいです。

【幸田】 そうなんです。

【横山】 今日見せていただいた発明品は、電熱系が多
かったですが、モーターを使うものは余りなかったで
すね。

【幸田】 ええ。

【荒木】 そうですね。

【横山】 モーターを使うとなると少し複雑になるから
でしょうか。

【幸田】 そうですね。

【横山】 モーターを使うと壊れやすいし、100 年前の
モーターが動いて、掃除機も動くというと、すごいで
すね。

【幸田】 ほんとうですね。

【横山】 手に入れられたら、是非お見せください。

では、そろそろ時間ですので、今日は、貴重なお話
をお聞かせいただき、また、エジソンの発明品を見せ
ていただき、どうもありがとうございました。

【幸田】 はい、わかりました。どうもいろいろご苦勞
さまでした。ありがとうございました。

— 了 —